

自己評価報告書

平成23年 4月 5日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011年度

課題番号：20720167

研究課題名 (和文)

入明記の史料学的研究に基づく日明関係における大内氏の位置の解明

研究課題名 (英文)

Studies on Ouchis' Position and Rolls in the Japan-Ming intercourse Based on the Historiographical Analysis of the Japanese Travel Sketches (*Nyumin-Ki*)

研究代表者

須田 牧子 (東京大学・史料編纂所・助教)

研究者番号：60431798

研究分野：日本中世史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：交流史・史料研究・中世史・日明関係史

1. 研究計画の概要

本研究は、日明関係に関わる史料の収集と分析を通じて日明関係史研究を深めていくこと、そしてそれを基礎に日明関係における大内氏の位置を明確にし、中世後期国際関係の実態とそれが国内政治史に与えた影響を解明していくことを目指すものである。具体的には、(1)各種入明記についての翻刻・注釈の作成を行なう。この際、入明記の記主の文集をはじめとする関連史料の検索成果を活用し、入明記および関連史料相互の関連付けを行なって、遣明船の故実・先例がいかなる形で伝授されているかを明確にし、入明記が伝える各回の遣明船の実態を詳細に検討する。(2)入明記の記主、特に最も多くの入明記を蓄積し自らも書き残した策彦周良の動向を大内氏との関係を軸に整理する。この成果をもとに大内氏の外交を支えた人脈とシステムを復元し、第一の成果と併せて大内氏の対明外交への参入とその掌握が国内におけるいかなる政治的折衝の結果であったのか、とりわけ故実・先例がものをいう外交関係において大内氏はいかにしてそれを獲得したのかという点を明確にし、中世後期政治史に日明関係の展開を有機的に位置づけることをめざす。

2. 研究の進捗状況

(1) 現存最古の入明記である「笑雲瑞訥入明記」について、これを翻刻・研究し、その成果を『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』と題して刊行した(村井章介氏と共編)。「笑雲瑞訥入明記」は15世紀半ばの宝徳度遣明船の際の日記である。宝徳度船は大内氏が初めて参加した遣明船であり、日明関係の画期をなした遣明船でもある。全359頁、読

み下し・注釈編170頁、諸本との対校成果を反映させた原文編64頁、参考資料編70頁に、須田による解題、村井氏による解説を付した。注釈編の注の数は734に及び、各種文献資料の調査結果はもちろん、現地踏査の成果をも織り込み、写真・図版も多く収録することができた。この種の本の常として完璧はありえず、訂正箇所もすでに多く見つかっているが、注釈本の刊行は、入明記としては初めてのことであり、今後の研究の叩き台となる、意義ある成果と自負している。

(2) 入明記研究のための根本史料である「策彦入明記録及送行書画類」(45種の史料を含む。京都国立博物館寄託・妙智院所蔵)について、①ご所蔵者と関係諸機関のご理解ご協力のもとに写真撮影を行ない、「妙智院史料」と題して所属機関の図書室に入架し、入明記研究が広く行なわれるための基盤を整えた。この際、従来から所属機関に所蔵される謄写本・影写本・模写・写真等との関係が明確になるような形でデータを整理し、検索の便を図った(所属機関のデータベースで検索可能、または『東京大学史料編纂所紀要』44号、66-68頁参照)。②この史料群の性格解明のために、翻刻・写本の検索・関連史料の収集を行ない、検討作業を進めている。

(3) 大内氏研究の一環として、従来進めてきた研究に、本科研による成果を加え、『中世日朝関係と大内氏』と題した単著を刊行した。これにより大内氏の日朝関係を整理・通観できるようになり、大内氏のもう一つの外交関係であり本科研の主題たる日明関係を見通していく基礎的な条件を整えることができた。

3. 現在までの達成度

区分：②（おおむね順調に進展している）。

進捗状況の（1）で述べたように、本科研では、昨年度までに、入明記研究の成果として『笑雲入明記』の刊行まで実現させることができ、種々の研究成果をここに盛り込むことができた。これは研究目的の（1）に対応する成果である。また進捗状況の（3）で述べたように、大内氏研究についても本科研の研究成果を加えることにより、単著の刊行という成果を挙げることができた。これは研究目的の（2）にかかわる成果であり、この意味で、本科研は順調な進展をみているものと考えている。一方で、進捗状況の（2）で述べた作業（継続中）の結果、策彦周良にかかわる入明記とその関連史料については、予想以上に豊かな内容と膨大な関連史料が得られたため、史料そのものの整理と検討という基礎的作業に追われ、その調査・研究成果はいまだ概略しか公にすることができていない。この点が最終年度に果たすべき課題として残されている。したがって、順調に進展しているが、当初の計画以上に進展しているとまでは言えない程度の達成度であると判断している。

4. 今後の研究の推進方策

（1）現在までに進めている入明記及び関連史料の電子データ化・原本との対校による良質なテキストの作成を継続するとともに、得られた知見のまとめの作業に着手する。策彦周良にかかわる部分の知見をまとめ、しかるべき場に発表することを優先課題とする。

（2）室町政権および大内氏の日明関係への関与の状況とその特質について、本研究で得られた知見をまとめ、しかるべき場に発表する。

以上2点に重点を置いて研究をすすめることで、本科研の研究目的を十分に達成できるようにする。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ①遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、「史料紹介：綱光公記一享徳三年暦記」、『東京大学史料編纂所研究紀要』21号、査読無、88頁/101頁、2011年3月。
- ②須田牧子、「朝鮮使節・漂流民の日本・琉球観察」、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』第四巻、吉川弘文館、査読無、215頁/231頁、2010年7月。

- ③須田牧子、「『笑雲瑞訢入明記』書誌的研究」、王勇編『人物往来与東亜交流』光明日報出版社（中華人民共和国）、査読無、297頁/307頁、2010年5月。

- ④遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、「史料紹介：綱光公記一文安三年・四年暦記」、『東京大学史料編纂所研究紀要』20号、査読無、99頁/111頁、2010年3月。

- ⑤須田牧子、「加賀の大内氏について」、山口県地方史研究会『山口県地方史研究』99号、査読有、1頁/18頁、2008年6月。

〔学会発表〕（計3件）

- ①須田牧子、「倭寇図巻再考」、東京大学史料編纂所・同附属画像史料解析センター共催国際研究集会「比較研究「抗倭図巻」と「倭寇図巻」」、2010年11月12日、於東京大学。

- ②須田牧子、「大内教幸考」、史学会大会日本史部会、2009年11月8日、於東京大学。

- ③須田牧子、「『笑雲瑞訢入明記』の書誌的検討」、浙江工商大学日本文化研究所主催国際シンポジウム「東アジア文化交流—人物往来」、2008年7月27日、於中華人民共和国杭州市・杭州湾大酒店。

〔図書〕（計2件）

- ①須田牧子『中世日朝関係と大内氏』、東京大学出版会、2011年、全304頁。

- ②笑雲瑞訢著、村井章介・須田牧子編『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』、平凡社東洋文庫、2010年、全359頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

なし。